

オック語・フランス語の接尾辞 -aticum > -atge/-age の硬口蓋音の成立
過程*

Palatalisacion del sufix -aticum en galò-romans

多賀 吉隆

Yoshitaka TAGA

0 始めに

この論文の目的は、ラテン語の接尾辞 -aticum が、オック語の -atge, フランス語の -age に変化していく過程に代表される音韻変化を探ることである。

この音型ではスペイン語で、*portaticum > portadgo > portazgo 「通行料」と変化したのに平行して、*-aticum > *-ague のような口蓋化をしない形が予想される。しかし、フランス語、オック語、カタロニア語では、類似の音型で下の表のように硬口蓋音に由来する音が現れる場合が多い。

	ラテン語	フランス語	オック語	カタロニア語
-Vtīcum	*salvaticum	sauvage	salvatge	salvatge
-Ctīcum	porticum	porche	pòrge	porxo
-Vdīcum	medicum	†miege	mètge	metge
-Vnīcum	*manicum	manche	(margue)	(mà nec)
	monachum	moine	monge	monjo
	canonicum	chanoine	canonge	canonge

ただし、†は古語の印である。

なお、オック語については、資料を等質にするため、サブシステムに属する音型を揃えるため、中央ラングドック方言の現代語の形を中心に扱う。この方言は、ベズィエ、カストラ、アルビを含む地域で話される方言であり、比較的古風な性質がある。¹ この方言以外では、口蓋化を起す *manicum > mange, 逆に口蓋化を起さない monachum > morgue, canonicum > canorgue の形もある。

以下では、まず伝統的な仮説を否定した上で、/dʒg/ という子音連続による仮説について論じる。

1 /dy/ による仮説の問題点

フランス語の歴史音声学では、母音の違いなどを無視してまとめると次のような変化が考えられている。

(1) -atīcu > */-adego/ > */-adyo/ > */-adjo/ > -age

Zink(1989: 225) は、この変化が、「細部においてはまだだが、大筋では確実」であるという。しかしながら、次のような問題点がある。²

1. /k/ の弱化の度合が大き過ぎる。Fouché(1961 : 553, 630) に代表される古い考え方では /k/ > ∅, La Chaussée(1989 : 77, 86, 181, 182) に代表される新しい考え方では /k/ > /y/ である。フランス語では, secūrum > †sēur > sūr 「確かな」, plīcat > ploie 「曲げる」のように同じ程度の弱化はあるが、オック語、カタロニア語の segur, plega の弱化とは異なる。Bourciez(1967: 156-157) は、「無強勢の母音に挟まれて、弱い語末にあるので」より大きく弱化をするというが、この考えはフランス語のプロパロキシトンの語末の子音の弱化の度合が lāpidum > tiède 「なま微温い」のように小さいことに反する。
2. /y/ > /j/ が起りえる環境ではない。この変化は linēum > linge 「布製品」, cerēum > cierge 「ろうそく」のような「晩成のヨッド(y tardif)」による偽口蓋化であるとされる。しかし、/n/と/r/の後以外でこれが起こったとされる例は、フランク語起源の *waddi > *wadium > gage のみである。これも通常の /dy/ > /y/, 例えば, *grōdi+ārīum > gruyer 「森林監視官」という変化から考えると、重子音のために /ddy/ > /dj/ と変化したとすべきである。
3. /-dicare/ > /-cher/, /-ger/ を説明しがたい。フランス語のピカルディー方言などの /ka/ が口蓋化を起こさない方言でも、/d'k/, /d'g/ が考えられる位置で口蓋化が起こる。³ collocāre > coucher ≠ [kuke] 「寝る」に対して, *ex-radicare > arracher = [araʃe] 「引き抜く」, carricare > charger ≠ [kəʃe] 「荷を積む」に対して, judicare > juger = [žyze] 「裁く」となる。有声、無声の違いを /dy/ に帰着して説明することは、ほとんど不可能であろう。

以上のようなことから、(1) のように説明することはできない。

2 /d'g/ における口蓋化

/dy/ によるとすることができない以上、通常のプロパロキシトンの変化に従うとするのが妥当である。語末音消失を起こすことがあるオック語においても多賀(1995)で示したように語中音消失が起こり、次のように変化する。

(2) -a'icum > -adego > -adgo

問題はその後どのように変化したかである。

2.1 <tg>~<tj> の音価

古オック語の書記法の伝統では、Zufferey(1987: 173-174) も指摘するように<j>~<g> と <tj>~<tg> の対立があった。⁴ 例えば, m'ager ~ major 「より大きい」に対して, coratge 「勇氣」 ~ coratjos 「勇敢な」のように語彙素毎にどちらを使うか決っていた。彼はこれを正書法に基くと考える。実際, Lafont(1972: 62)によれば, 多くの現代オック語の方言, 特にプロヴァンス方言では同じ音価である。

しかし, 一部の方言では, Lafont(1971: 59)によれば, <tg> と <g> の対立は, [ddʒ] ≠ [ʒ], [ddz] ≠ [dz], [tš] ≠ [dž] で実現される。最後の対は, 無声・有聲の対立であるが, Magdalena の <gd> が [tt] ~ [t] ~ [d] と発音されるように重子音の無声化が起こったものであろう。⁵

したがって, <tg>~<tj> は /j/ = [ddʒ] であろう。

ここで, <l> は実際の音を表すのではなく, 重子音を表すディアクリティックであるとみるべきである。

Zufferey(1987: 175, 178) は, /bl/, /gl/ に <tbl>, <tgl> という表記があったことを指摘する。彼は, これらが [bb], [gg] であったと推定する。この考えは, 現代語で /bl/ が [bb] と実現される方言があることと一致する。

また, modülun > mòtle 「型」, *ret'ina > rètna 「手綱」などでも, <tl>, <tn> は現代語で [ll] ~ [l], [nn] ~ [n] と実現され, [t] が現れない。カタロニア語でも modülun > moll なので, <t> が [t] を表したとは考えにくい。

2.2 口蓋化と破擦音化

すでに, カタロニア語においては, 問題の音型の変化の過程が考察されている。

例えば, Duarte i Montserrat et Alsina i Keith (1984: 172-175) は次のような変化を考える。

(3) /deg/ > /dg/ > /dj/

が、<tg> は /jj/ と考えるべきなので、Rasico (1989: 465) 同様、Emili Casanova の次の説の方がより妥当であろう。

(4) /deg/ > /dg/ > /dj/ > /jj/

しかしながら、口蓋化と破擦音化が同時である必要はない。そこで、次の2通りの道筋が考えられる。

- (5) a. /dg/ > /dǵ/ > /ǵǵ/ > /jj/
b. /dg/ > /dǵ/ > /dj/ > /jj/

ここで考慮すべきなのは、Gaström(1958: 189-190) が指摘するように最初期のオック語の古文書に <ige> の代りに <igüe> が現れることである。<i> はすでに述べたように重子音のディアクリティックであるので、通常であればこれは /gge/ を表わすはずである。しかし、現代のオック語の全ての方言で口蓋化の起った形が現れる。

そこで、これは /ǵǵe/ を表わしているのではないだろうか。

ただし、実際に書かれた段階でこの音を表していると主張しているのではない。多くの場合、書記言語は何らかの伝統によっている。それほど、遠くない過去においてこうだったのではないか、ということである。

中央ラングドック方言では開音節での /e/ の2重母音化は、pedem > pè 「足」のように起らないが、/è/, /j/ の前では、lectum > lièch ~ lèit 「寝台」、pejum > pièg 「より悪い」のように母音が割れる。ところが、medicum > mètge と割れないので、問題の音型で /j/ が現れるのはかなり遅いと考えられる。

したがって、-ticum の変化は次のようであると考えられる。

(6) /tic/ > /deg/ > /dg/ > /ǵǵ/ > /jj/

3 結論と考察

一般に、音節のコーダ部の子音が音韻論的に調音位置の指定を受けにくいことが知られている。

現代オック語は、古オック語に比べてもこの傾向が強い。例えば、vièlh は、古オック語においては [vyɛλ] であったが、現代では [byɛl] であり、語末では /λ/ と /l/ の対立が

失なわれている。また、閉鎖音に /s/ が続く子音連続では、absolut が [atsulüt] となるように、閉鎖音が全て無標の [t] になっている。

問題にした音韻変化は、このコードの子音が位置の指定を受けない傾向を強めていく過程として解釈することができる。

まず、語中音消失で /dg/ の連続が生じた段階では /d/ は位置の指定を受けているはずである。そこで、同化により [d̥g] となっても [g] と [g̥] は相補分布をするので音韻論的には対立がない。

ところが、次の段階で /d/ が位置の指定を失ない逆行同化により [g̥g̥] となれば、/g/ と /g̥/ の対立は音韻論的な対立になる。しかし、これらの音は近いので /g̥/ が /j/ と破擦音化することで差異を極立たせ、/j̥j̥/ がえられる。

同様な分析は *manicum > margue と monachum > monge についても可能である。これらには、mange, morgue の異形もあるが、口蓋化した形と口蓋化しない形の両者がある方言では、日常語彙が口蓋化をしない形、教会語彙が口蓋化をする形であるようである。この違いは時期の差と考えられる。

まず、margue の形を考える。語中音消失で /ng/ が生じ、さらに同化により [n̥g̥] になる。この段階で [n] が位置の指定を失なおうとするが、comitem > comte などがあり、コード部で /n/ と /m/ の対立があるため、そのままでは失なうことができない。そこで、音声学的に近いが音韻論的に位置の指定を持たない /r/ に変化する。sinapem > serbe 「からし」の変化と同様である。その後、[r̥g̥] はより自然な [rg] になる。

より後の時代に語中音消失を起した monge では、[n̥g̥] になった段階で、コードにおける鼻音の位置の対立は弱まっているので、/N̥g̥/ に変化する。これは /Ng/ と対立するので、破擦音に変化する。

最後に今後の課題を述べておく。この論文は tic > /j̥j̥/ という変化の蓋然性の高い筋道を提案したに過ぎない。口蓋化とそれに関係する非口蓋化は、この音韻変化をする個々の言語でも幾つもの現象が絡みあい、複雑な体系をなしている。今後、それらの体系の中での位置付けを通して、この仮説の補強、修正をしていきたい。

【注】

- *) この論文はロマンス語学会第34回大会での口頭発表をもとに内容の追加を行なったものである。多くの資料を提供して下さった京都産業大学の小林標氏に特に感謝する。また、口頭発表のかなりの部分は多賀(1996)と重なるので簡略化した。
- 1) Barthe (1988: 13) 参照。また、オキシタニストのいう l'occitan général の元になる方言なので資料が入手し易い。
 - 2) より詳しくは、多賀(1996)を参照。
 - 3) Gossen(1976: 99) があげる現代語の例による。
 - 4) Zufferey は中世において <i> と <j> は同一の書記素であったので、<i>, <ti> と表記している。
 - 5) Lafont(1971: 68)。以下の現代中央ラングドック方言の音価もこれによる。

参考文献

- Anglade, J. (1921) *Grammaire de l'ancien provençal*, Paris: Klincksieck.
- Bourciez, E. et J. (1967) *Phonétique française: étude historique*, Paris: Klincksieck.
- Duarte i Monserrat, C. et A. Alsina i Keith. (1984) *Gramàtica històrica del Català*, 3 vol.
- La Chaussée, F. de. (1989) *Initiation à la phonétique de l'ancien français*, 3e éd., Paris: Klincksieck.
- Fouché, P. (1961) *Phonétique historique du français, III: les consonnes*, Paris: Klincksieck.
- Gossen, C.-T. (1976) *Grammaire de l'ancien picard*, Paris: Klincksieck.
- Gaström, Å. (1958) *Etudes sur la graphie des plus anciennes chartes languedociennes avec un essai d'interprétation phonétique*, Almqvist & Wiksell: Uppsala.
- Joly, G. (1995) *Précis de phonétique historique du français*, Paris: Armand Colin.
- Lafont, R.. (1971) *L'Ortografia occitana: sos principis*, Centre d'estudis occitans, Universitat de Montpelhièr III.
- . (1972) *L'Ortografia occitana: lo provençau*, Centre d'estudis occitans, Universitat de Montpelhièr III.
- Lanly, A. (1971) *Fiche de philologie française*, Paris: Bordas.
- Penny, R. (1993) *Gramàtica històrica del espanyol*, Barcelona: Ariel. Trad. de *A History of the Spanish Language*, (1991), Cambridge University Press.
- Rasico, P. D. (1989) «The formation of Valencian "Apitxat"», *Hispanic Review*, 59.
- Rohlf, G. (1954) *Historische Grammatik der Italienischen Sprache und ihrer Mundarten, III: Syntax und Wordbildung*, Bern: A. Francke AG..
- Zink, G. (1989) *Phonétique historique du français*, 2e éd., Paris: P.U.F..
- Zufferey, F.. (1987) *Recherches linguistiques sur les chansonniers provençaux*, Genève: Droz.
- Alibert, L. (1966) *Dictionnaire occitan-français*, Toulouse: I.E.O..
- Barthe, R. (1988) *Lexique occitan-français*, 3e édition, Toulouse: Collège d'Occitanie.
- Dubois, J. et al. (1993) *Dictinnaire étymologique et historique du français*, Nouvelle éd., Paris: Larousse.
- Fourvières, X. de. (1975) *Lou pichot tresor*, Avignon: Aubanel.
- Godefroy, F. (1937) *Dictionnaire de l'ancienne langue française*, 10 vol. Paris.
- Levy, E. (1973) *Petit dictionnaire provençal-français*, Heidelberg: Winter Universitätsverlag.
- Mistral, F. (1932) *Lou tresor dóu Felibrige*, 2e éd., Paris: Delagrave..
- Tobler-Lommatzsch. (1925-) *Altfranzösisches Wörterbuch*, Berlin-Wiesbaden.
- Wartburg, W. von. (1922-) *Französisches etymologisches Wörterbuch*, Bonn, Leipzig, Bäle.